

ハイデガー先生の思ひ出

小野浩

Einst habe ich die Muse gefragt, und sie

Antwortete mir,

Am Ende wirst du es finden.

Kein Sterblicher kann es fassen.

Vom Höchsten will ich schweigen.

Verbotene Frucht, wie der Lorbeer, aber ist

Am meisten das Vaterland. Die aber kost'

Ein jeder zuletzt.

—Hölderlin—

1

ハイデガー先生などといふ呼び方は、京都の辻村さんのやうに、永年、直接にこの碩学に師事し、その直弟子のやうな立場の人からみれば、いささか烏滸がましく響くに違ひない。然しこの半世紀に亘つて、この人こそ二十世紀唯一無類の思想家と仰ぎつづけてきた私にとつては、それにはまたそれだけの理由がなくもないのである。

ハイデガー先生との最初の結縁は、昭和五年四月、私が東北帝国大学独文学科に入学して高橋里美先生―当時学生間の通称里美さん、よつて以下里美先生と略記したい―のゼミナールに参加したときに始まるから、今日に於て既に

半世紀を超えたことになる。そのとき先生が用書に指定されたのは名著〈*Sein und Zeit*〉であつたが、初版刊行の一九二七年からすれば、僅か三年後のことにすぎなかつた。雑誌「理想」がハイデガー・ヤスパーズ両哲学者の紹介を特輯したのもその後、間もなくのことであつたと記憶する。年齢二十一歳の少年に過ぎなかつた私が、臆面もなくこの演習に参加したのは、仙台一中時代の恩師、舟田千町^{ちまち}先生の紹介に与り、既に高校生時代から先生のお宅に伺つて、盲人、蛇に怖ぢず、哲学的ベートホーヴェン論などをぶちあげて先生を手こずらせるやうなことをしてゐた心安さから、ハイデガー哲学の難解性などについては全く何の予備知識もなく、先生のセミナーに跳びこんで行つたのである。

最初の時間、助手の人からタイプに打つた〈*Sein und Zeit*〉の最初の数頁が配布されたと記憶する。先生からは、ハイデガー教授の経歴やこの書の成立の経緯について簡潔な紹介があつたが、その内容は殆ど憶えてゐない。唯一つ、ハイデガーはヘーゲル以後の最も優れた哲学者で、本書はその「精神現象学 (*Phänomenologie des Geistes*)」に比肩する名著であるといふ先生の言葉だけがなほ鮮晶に心に刻みこまれてゐるにすぎない。これは、当時あたかも、ヘーゲル復興の気運著しく、私などもその熱に浮かされて、リヒアルト・クローナー (*Richard Kroner*) の「カントからヘーゲルまで (*Von Kant bis Hegel, 1922~24*)」などを読み噛り、「精神現象学」の相当精しい解説などにも接し、ゲーテのヴィルヘルム・マイスターなどとの出入開合の関係などを勝手に想像したりして、将来に必読を期してゐたのによるものかも知れない。

つづいて里美先生は、〈*Einleitung*〉に先立つ緒言の冒頭に出てくるプラトンの「ソピステース」からの引用 (244a) をギリシャ原文のまま読み上げ、直ちに邦訳されたので、これには一寸毒気を抜かれたのだつた。それでギリシャ語発音の、強い東北訛りにも拘らず、お宅に伺つて親炙させて頂いた先生とはまた異なる堂々たる風格のプロフェッサーを^ま目のあたりにして改めて畏敬の念を覚えた。

何はともあれとて、つもなく六ヶ敷しいらしいが、よく先生を存じ上げてゐるだけに、一度出席した以上、滅多にサボルわけにもゆかず、これは大変なことになつたと当惑した私の子供ポイ顔を見て、先生は一寸微笑を洩らされたやうであつた。然し一方、未知の世界に挑戦してみようといふ少年の客氣にも駆られて、直ちに丸善に原書を注文し、入手し得たのは後期講義開始直前の一九三〇年九月三十日のことであつた。これは当時の記入によつてはつきり判るのである。

かうして私は兎も角も里美先生によつて有無を言はずハイデガー哲学に結縁させられたのであつた。

先生がフッサール門下としてハイデガーと学問上の〈僚友 (Kollege)〉であつたことは知られてゐる。先生帰朝に当り、ハイデガーの肝煎りで送別会が催され、フッサールも臨席したが、フッサール曰く、「タカハシ、君は日本へ帰つたらわしの哲学を講義して呉れるだらうな?」、先生答へて曰く、「必ずしもさうでない」。座が白らけてハイデガーあたりが相当に幹旋に氣をつかつたらしいといふこと、旧台北帝大のM教授あたりから伝へられたらしい。事の真相は明かに致しかねるが、両哲学者の風貌風格がおのづから眼前に髣髴されてまことに興味深いものがある。

何はともあれハイデガー哲学生成の過程を、この優れた僚友との親密な交遊を通じて現場に於て触知された先生によつて、ハイデガー哲学の核心に照準せしめられたことは、私にとつてまことに幸福であつたと言つてよからう。さもなければ、本来門外漢の身、ハイデガー哲学の最初の難関を透過することは恐らく不可能であつたらう。

かうして高橋ゼミの模範的学生とは必ずしも言へなかつたとしても、ハイデガー哲学理解のために、私は私なりに全力を傾注した。そして兎も角、第三章、「世界の世界性 (Die Weltlichkeit der Welt)」の終り、即ち第二十四節、「現存在の空間性と空間 (Die Räumlichkeit des Daseins und der Raum)」のところまでは惨憺たる辛苦を重ねて読み了へたのである。一つ一つの概念規定の精刻にして深邃なる趣致を洞察し、その層々たる積み重ねの必然的脈絡をつねに眼底に収めつつ読み進むことは、真に容易ではなかつた。当時どの程度まで理解できたかはもとより疑問である

が、矚目のハイデガー研究書、論考、解説書には殆ど目をとほしつつ、そこまで漕ぎつけたことは、後期のハイデガー理解のための掛替へのない基礎となつたものと確信する。

2

ハイデガーの哲学的思惟の展開は、一応、これを前後の両期に分けて考察することができらう。前期即ち一九四〇年以前の彼は、基礎的存在論の立場から、人間存在の本来的動態を解明しつつ、そこにひそむザインの隠微な面影を、謂はば炙り出しにかけ、そこからザインに指標する人間存在の座標的位置を探り出さうとしたのに対し、後期の彼は、人間実存をして、それがもと／＼ザインの運命のなかへ緊密に織りこまれてゐるものであることを照覚させ、その照覚に於てザインへの慎密な聴従を決意させることこそ、真の意味の実存的決断と呼ぶべきものであることを教示しようとしたかのやうに思はれる。

それなら〈ザイン〉とは果して何ものであるのだらうか。辻村教授がそれに対して〈有〉といふ訳語を付されたことにはもとよりそれなりの根拠のあることは察せられる。ところで「字源」によれば、〈有〉は〈無〉に対し、〈在〉は〈没〉または〈去〉に対して用ゐられる。〈有〉の下は物―「市有」―「人在」―「市」―である。つて、「死生有命、富貴在天」などによつてこれを知るべし、とある。〈存〉は物が現にあること、〈亡〉の反対、保ち全うする意味がある。私としては〈ザイン〉の訳語は必ずしも〈有〉とか〈存在〉とかの一方にだけ限定せずともよいのではないかと考へる。素人臭い考へを脱白に表明すれば、〈ザイン〉とは、「あり、ありて、あるもの」、無始から無終にありて、人間をも含む森羅万象、即ち一切の〈存在者 (Die Seienden)〉に隠微な影を宿しつつも一切の存在者を包越し、人間主体の側からする一切の対象化を拒絶するものを指すのではないかと思はれる。ハイデガー自身は「思惟の経験から (Aus der Erfahrung des Denkens, 1954) に於て特に〈seyn〉といふ言葉を記前して居り、辻村氏のやう

にこれに〈玄有〉といふ訳語をあてるなら、〈sein〉は〈有〉であつてよいかも知れない。

何はともあれ、後期の彼に於てとりわけ私たちの心を強くひきつけるものは、このやうな〈ザイン〉そのものの運命のなかへ緊密に織りこまれてゐる人間存在の側からする〈玄有理解〉が、言葉、とりわけその高度の昇華並に純粹結晶としての〈詩〉のなかに密封されてゐるといふ洞察である。後期のハイデガーが、西欧詩文の世界に於て、絶類の詩宗と目されるヘルデルリン詩業の解明に心血を注ぐに到つたのは思ふに当然の帰結であり、私自身としても最も強く関心を抱かせられたのも、ヘルデルリン詩の解明者としてのハイデガーに外ならなかつた。とりわけあの〈帰郷 (Heimkehr)〉の問題をめぐつて繰りひろげられてゆく綿密極りなく精刻無比な思惟の強靱さには屢々巻を掩ふて三嘆させられたが、然しどうしても腑に落ちかねる重大な一点に疑問があり、これは是非先生の生前にお目にかかつて、教示を得たいものと念願したのである。

それで昭和四十二年夏七月十四日より三ヶ月間、明治大学からドイツ出張を命ぜられたとき、これを好機にこの念願を果たさうと決意したのであつた。

この出張は、何分短期なので、見学の重点を極度に絞らぬわけにはゆかなかつた。まづ独文学関係では、ゲーテ、ヘルデルリン、ニイチェゆかりの地、フランクフルト、テュービンゲン、バーゼルの見学を主とし、次にドイツの国土そのものに深く根を卸してゐるために、日本ではみることも聴くこともできぬもの、即ち北から南へライン河沿ひに点在し、また南独、スウイス、イタリアなどの要所要所にちとばめられた代表的諸都にみられる、ロマネスクからゴシックを経てバロックに及ぶカテドラーレ、ドーム、ミュンスターなどの建築様式とその壁面を飾る壮麗なグラアスフェンスターを觀照し、そこに蔵せられてゐるパイプオルガンの演奏を聴くこと―ヴィーンフィルやベルリンのシュターツオーパアの演奏の類は日本でも聴く機会がある―第三にハイデガー先生を訪問して上記の疑問に対する教示を仰ぐことである。然しこの第三目的が果して達成できるかどうか、まことに心許ないものがあつた。

3

一九六七年七月十五日(土)、二二時二〇分、羽田発、アンカレヂ、コペンハーゲン経由でハムブルク着、滞在二日で、フランクフルトに移りて二泊、北行してボンからデュッセルドルフにゆき、それ／＼一泊、南下してケルンに一泊、コーブレンツに出て、そこからマインツまで七時間のライン下りを楽しみ、深夜再びフランクフルトに帰つた。その間、僅か一週間にすぎなかつたが、快晴にめぐまれ、立案と準備の精確に加ふるに、それ／＼の現地にゆかり深い友人知己の心こもつた歓待と指導により、まことに内容の濃い成果を収めることが出来て仕合せであつた。おかげで観るべきものはみ、聴くべきは聴き、味ふべきは味はふことが出来た。その内容は記述の必要がないであらう。

4

七月二十三日(日)、晴、十三時フランクフルト発、夕刻十七時近くフライブルク着、差当り Hotel Post へ入る。これから二ヶ月、この町に本拠を据ゑるのである。南独やスイスの諸都市をみてまわるにも、イタリアに出るにも、ここは恰好な足場になる。予め十分調査研究した上で、それ／＼十日前後の日程を組み、それに従つた見てまわり、またこの拠点に帰り、数日休養して次のコースに移ることが出来る。それに何よりも大事なのは、フライブルク近郊の Röt buckweg 47 にハイデガー先生が隠棲して居られることである。以上、二つの理由からドイツ滞在の三分の二をここに腰を据ゑることにした。遂にハイデガー先生の身近に来たのである。

七月二四日(月)は、ホテルに滞在、ゆき当りばつたりに市内散策にすごしたが、翌二十五日(火)、かねて畏友熊谷信夫医博に紹介された Erb 氏の斡旋で Sternwaldstraße の Frau Harter 方に落着く。ここは北に樹林に蔽はれた

丘陵―即ち Sternwald―を負ひ、丁度、愛宕山を南にした仙台の土樋から片平町辺の地形に酷似してゐるこの丘陵地帯は下宿から徒歩で十分程であらう。毎日快適な散歩が楽しめるわけである。

フラウ・ハルテルは世間並に甲羅を経た六十がらみの未亡人で一見、決して好ましい人柄ではないが、殊更、悪質とも思はず、人並に慾のある平凡な婦人と見受けられた。部屋に案内してもらふ。陰かげの方ひなの鄙ひなびたせせこましい部屋で、家具などもお粗末の一言につきる。女中部屋でもあつたのだらうか。これが一五〇マルクとはとても信じられない。百も出せばホテル並の相当の部屋に入はいられると聞いてきたが、何か一本とられた感じである。真剣になつて移転のことを考へ出したころ、約十日ほどで、倍以上の広さの、相当な隣室に入れてくれたので助かつた。これなら何とか二ヶ月は辛抱出来るだらう。

5

七月二六日(水)、晴。午前中に住民登録を済ませ、この町と馴染みを深くするために、その中心部をゆつくり眺め歩いた。そして昨日も一見して感銘を受けたミンスターを訪れる。その広場プラッツをかこんで一流のホテル、レストランがある。代赭色の砂岩らしいものを素材としたこの暖か味のある堂宇は、ロマネスク風の重厚な趣の失はれてゐないゴオティック様式で、大地に根差したどつしりした安定感と高きへ指標するゴオティック風の上昇意志とが微妙な均衡を保ちつつ伽藍独特の輪奐美を發揮してゐる。そこにはケルンのカテドラーレでみられたやうに、ひたすら高きへ急ぎ登らうとする性急な危うさも、人を近づけぬ威圧的姿勢も感じられない。私はその〈程ちかのよよさ〉に心からの親しみを覚えた。生れ故郷に近いこの古都に於て、哲人としての本来の使命を遂行しようとして、屢々生死の岐路に直面したとき、この風韻高き本寺の姿と、シュテルンヴァルトの静けさが、煦くハイデガー先生を抱擁したであらうことは、おのづから想像されるところである。

またその壁面を飾るガラスフェンスタールも優秀である。私はまだシャルトルをみてゐないから比較はできないが、その規模に於ては及ばぬにしても、質の点からみて、これはこれとして一流ではないであらうか。数世紀の風雪に堪へてきたのにもよるであらうし、堂内の暗らさといふこともあるであらう。また素材が特殊な色彩に焼き上げられた硝子であることもあつて、外からは何もみえぬこのフェンスタールの、陽光に濾過された色彩のニュアンスはまことに絶妙である。それは燦煥たる天日のもとでも観るに耐へる色彩の絢爛たる明るさとはまた異つて、陰闇な密室で始めてその本領を發揮するうるはしさである。聖書に物語られた諸々の説話―その血醒さによつて馴染みがたさを印象させずにはおかぬあの説話類も、謂はばこのやうな精神病理的に美しい色彩に乗つて始めて独自の隠微な消息を開示し得たと思はれる。〈精神病理的〉と言つて悪るければ、〈キリスト教風の渋味〉と言つてもよいかも知れない。〈粹^{イキ}〉が日本だけでなく、西欧の洗練された芸術や服飾にもみられることは周知の通りである。然し〈渋さ〉といふものを中世以後に於ける日本特有の美と考へてきた私にとつて、この堂宇のガラスフェンスタールに於て、〈キリスト教的渋味〉といふものを目のあたり直観させられたといふことは大きな収穫であつた。要するに〈燻金^{いぶし}〉風の渋い美しさといふものは、生の原色の美が、深く湛へた宗教的心情といふフィルターにかけられたところに、微光を放ちつつあらはれてくるものではないであらうか。よつて渋い美しさの根柢に人は、それを支へる宗教的心情の存在を予想してもよいかも知れない。もとより日本風の渋味とキリスト教的渋味の根源にあるものとは異つてゐる筈である。この点について短絡的迷想を避けるためには、精妙なる感性を探針として両者の隠微な差違を味識しつつ、いささか比較文化的考察を遂げておかなくてはならないだらう。

※※

※※

※※

神の世と人の世との境目に立ち、まさに神の世に別れを告げようとして、私たちの祖先が、古事記上巻のむすびに据ゑたのは、「赤玉は緒^おさへ光かれど、白玉の君が装^{よそひ}し貴くありけり」の一首であつた。これは新生の御子

鶺鴒草茸不^{ウガヤフキアヘズノミコト}合命を産み置かれたまま、心ならずも最愛の夫^セの君日子穗穗^{ヒコホ}手見命^{テミノミコト}に別れ、「海坂^{ウナサカ}を塞^セぎて」父なる綿津^{ワタツミ}見神^ノの国へ帰られた豊玉昆売命^{トヨタマヒメノミコト}が、「恋しき心に忍へたまはずて」、永言して夫の君に奉られたものと伝へられてゐる。それに応^{こた}へまして命は、「沖つ鳥 鴨どく鳥に わが率^あねし 妹は忘れじ 世のことごとくに」の一首を贈られたのであつた。

まさにほかならぬこの箇所^{かた}に、かくも愛^{あな}しくうるはしい相聞歌を据ゑた古人の深く邃^{とほ}い心ばせを偲びつつ、またこのやうな古典を伝統の根源に仰ぎみる幸を味ひつつ私たちは、日本美の源流が、楚々たるへしらたまのうるはしさにあることを想ふのである。

ところで〈あか〉は日本に於ては、本来五彩の一つとしての〈赤〉ではなく、〈明^{あか}き浄^{きよ}き直^{なほ}き心〉と言はれたやうに〈明か〉であることは忘れられてはならないであらう。〈明^{あか}き心〉に〈赤心〉とか〈赤誠〉の漢字をあてはめたのは、やはり〈からごころのさかしら〉に発したものかも知れないが、この〈赤〉は〈明か〉に飽和された赤であり、赤が日本に於て吉色であることもそこに由来すると思はれる。

私たちが〈赤き血潮〉といふとき、それは純潔なる心臓を起点として暖い海潮のやうに生ける身体を周流する脈々たる血の流れであり、身体の一部の損壞によつて体外へ溢出し、瞬間にして黒ずみ固結し去る死血ではない。よつて私は〈あかだま〉は〈明か玉〉なり、といふ橘守部の見解^{くみ}に与^ありたいと思ふ。即ち彼は、「玲瓏^{スエトホソ}で、貫^{スゲ}る緒まで輝くよしなり」と註し、さらに、「此^こは白玉^{むか}に對^{むか}へたれば赤玉とみるべく」と解するのである(「稜威言別」)。それならへしらたまとは何であるか。武烈天皇なほ皇太子にましませしとき、物部^{モノベノアラカヒノオホムラジノムスメ}麁^{カガヒメ}火大連女、影媛^{カガヒメ}に賜りし歌のなかに、「アガホルタマノ・アハビシラタマ」の語がある。上記守部註によれば、〈アハビシラタマ〉は〈鮫真珠〉であり、シナ風の〈白玉^{ハクギヨク}〉ではなく、〈真珠〉であつたと考へられる。それは養殖真珠のやうに人為的に華麗なものではなく素白に近く、楚々^{びやくちゆう}たる白光^{びやくちゆう}を放つて人の心を浄める天然真珠であつたであらう。

(駐) わが国の古代では、琥珀が往々にして「赤玉」と呼ばれた。おほむね半透明の黄色系の琥珀だけを見なれた私たちの常識からすれば、これは奇異に感ぜられる。ところで数年前のこと、奈良に正倉院展を一見したとき硝子窓ごしに眺めた古代の黒色にみえる数珠には琥珀の標示があつた。恰もその前日奈良のさる骨董店でみつけた新羅時代のものと伝へられる桃を型どつた琥珀玉は、一見して黒色にみえながら、陽光にすかせば、燃えるやうなヴァインレッドの奥深い輝きのうちに松の葉らしいものを抱いたのがまことに魅惑的で、直ちに購入の約束をしておいたので、この数珠もこの種のものであることは見当をつけることができた。「赤玉」としてのこの種の琥珀は恐らく古代に於ては韓国が原産であり、日本固有のものではなかつたであらう。

いづれにしても、日本本来の「しろ」は、五彩の一つとしての相対的「白色」ではなく、五彩を含んでそれを包越する「しろ」であり、本来は色のないものでありながら、陽光をうけた雪片がプリズム現象を示すやうに、千変万化するのである。伊勢神宮の「白木づくり」の「白」もまたこの次元のものであらう。「しらたまのよそひ」といふ言葉からおのづから連想されるのは、白絹の御衣おんぎをよそはれた日子穂穂手見命の膺うらたけたすがくしいお姿である。いまこの一文を草しながら筆者は、正絹の「しらぎぬ」の布片を手許に眺めつつ考へる、古代に於ても織りたての絹を無晒しのままに御衣に使用したのではなく、やはり日光にあて、恐らく冬の清流にひたして晒したものを用ゐたのであらう、と。「橘の島にし居れば 河遠み 曝さらさず縫ひしわが下衣」といふ一首(万葉卷七「寄衣」)はこの間の消息を伝へてはゐないか。もとよりいま私が眼前に眺めてゐるものはその象牙色の深さに於て、古代のものと異つてゐるかも知れない。然し同じ風趣が全く失はれ去つたわけでもなからう。これにもなほ、燦煥たる陽光を収斂して「ふふみ」豊かな寂光と化し去る力は蔵されてゐるのだから。

同じことは和紙についても言へるであらう。ケント紙やアート紙の白さはやはり「白色」の「白」である。「フアブリアーノオ・アマアノオ」のやうな手漉の紙にしても事情にさして変りはないと思はれる。直接に光を反射する西欧の紙には、日光さへ和らげる和紙の微妙な力は宿つてゐないからである。

今となつては、その方面で日本でも唯一人、大和の吉野の国栖の里で、吉野川の清流に晒して手漉の紙を製造してゐる昆布きよのさんの〈美須紙〉は、日光にかざせば、外の風景がすけてみえるほど薄く透明でありながら、白く長い楮の繊維がしつかり強く絡みあつてゐるので、驚くほど強靱なのである。私は仕合せなことには、表具の名手菅野徳孝氏からその裁ち屑をもらひうけることができた。

この紙も材料は勿論楮である。白い肌の楮の皮は筵の上にひろげて冬の天日に干され、二月の清冽な吉野川の川底に沈めて晒らされた上、釜に入れて何時間も煮てアクをぬかれるといふやうな過程を経て製されるのである。

絹の曝らしにも和紙の晒しにも共通なのは、いづれも厳冬の清流乃至清澄な寒水に俟つといふことである。そのしろさがともに氷雪の澄明さと親縁関係を結ぶといふこともまた自然の数であつた。わが国のへしろががつねに雪の白さにたとへられることを人は改めて深思すべきではないであらうか。

雪の白さも、本来は色なき色であり、従つてその雪を描くには、画家として並々ならぬ修練を要すると思はれる。古今の秀作のうちから雪を主題にした作品を集めてみたら興趣はまた格別であらう。私たちと同じ時代の空気を呼吸され、近年物故された小野竹画伯は、雪を描いてもまた名手であつた。「深雪」、「残雪」、「宿雪」、「樹上新雪」など、さまざま雪が描かれてゐるが、私としては、「深雪（一九五五年）」と「樹上新雪（一九七一年）」に於て最もよく日本の雪を感銘する。

先日、東山魁夷展を近代美術館に一見した。これまで数回の展観や画集によつて馴染みを重ねてゐたから、今回は未知の大作に接して改めて構想の雄渾と筆力の卓抜、色彩の微妙なスカーラに感銘した以外に、特に眼睛を刺破されることもなかつたが、一作々と眺め進んで、最後に「白い朝」の前に立つたとき、深い感動に暫らくは身動きができなかつた。もう春は立つてゐるかも知れない。然し樹幹に樹枝に春の雪はなほ重い。一羽の雉鳩が、雪に蔽ひつくされて交錯する樹枝のなかに埋まるやうにして、背をこちらに向けて一本の細枝に危く身を支えてゐる、寒いのであ

らうか、頭部を両翼の間に引込めて。そのかすかに青みを帯びた代赭色の羽毛のところどころに早乙女の爪つまぐれなる 紅を想はせるほんのりした薄紅がさして、幽情まことに掬すべきものがある。これまで東山さんが描かれた西欧の雪にはどこかにチーズケーキを思はせる粘り気があつたり、サンタ・クロースがどこからか覗いてゐるやうな人間臭さがあつた。成程、一九七〇年作の「雪の城」では、そのやうな人間臭はなくなつて居り、雪そのものがよく描きとられてはゐるが、構図のせいでもあらうか、その鋭さにはやはり西欧風の劔気のやうなものが感ぜられた。然し「白い朝」のふんわりしたこの春の雪はやわらかに水気を含んでまさしく日本の雪であつた。それは野鳥や兎のやうな生きものたちとまことによく応和するものでありながら、いささかも人間臭をおびてはゐない。さればと言つて、人間を厳しく拒絶するやうな非情のものでもなかつた。

この鳩もその風韻に於て、まさしく日本の鳩である。それは徽宗皇帝描くところの宋元院体風のシナの鳩ではない。それは画家の視角と、そこから描きとられる姿態の相違だけには止まらないと思はれる。風格の高さに優劣はない。然しこの鳩には私たちの肌になじかに触れてくる煦がさがある。その啼き声まで耳にきこえてくるやうである。

鳩が啼く城山がたの朝ぐもり春も七日の雪ちらふなり（安江不空）

畏友橋本博英氏は、一切の私意を蔽しく放却して、自然を語らしめながら、好んで春雪の山を、また碧い海の上にポッカリ浮んだ春の雲を描かれるが、最近の個展に出陳された諸作のうち、私はとりわけ、「木綿の木」の一点に注目せしめられた。蒴果内の種子に着生するあの白くやわらかな綿毛がまことにふんわりと描きとられてゐるのである。ここにもまた昇華された日本の「へしろ」があつた、しかも西欧の白色顔料を使用して。

またここに、和漢共通のものではあるが、古代白銅鏡の色なき色についても一言しておきたい。たとへ素材が銅の合金ではあつても、その磨きあげられたものは無色澄清、虚無のうちに白光を放ちつつ万象を照し出して蹤跡をとどめぬ鏡本来の妙用發揮の点では、決して現代のものに劣ることはなかつたであらう。夙に仏教渡来以前に、その思弁

哲学を眼下にしなから、莊子ははやくも、「至人の用心、鏡の如し、將らず迎へず、応じて蔵せず」といふ玄妙な一句をのこしたが、この言葉が、日本古道の真髓をその一閃のうちに照し出す威力あるものであることも否定することはできないであらう。

さらに、日本本来の「へしろ」を語つて、どうしても逸することを許されぬものにあの絶類の刀劔がある。いまそれについて詳説する余裕はないが、かの「白刃」が、往々にして「嚴寒、氷を割つたやうな」と形容されるにしても、必ずしも表現過剰でないことに、改めて認識を促したいと思ふ。いかにもこの形容は鋭利であり、人によつてはそこに「殺氣」だけを読みとるかも知れない。凡そ触れるものは、金鉄と雖も悉くこれを切断するには極度の鋭利と強靱とを要するからである。然し「邪惡」の斬却を直接の任務とする刀劔には、同時にそれによつて高次の生に奉仕するといふ使命もまた課せられてゐるのである。これは単なる「殺氣」のみによつて達成される課題ではないであらう。古来日本の刀匠がこの原理的視点をゆるぎなく堅持し、白衣に身をつつみ、神明の照覧を願つて鍛造に従事したことは万人の知るところである。私の乏しい体験から言つても、一流の名刀を諦視した場合、「殺氣」のみを感じたことはまづ皆無と言つてよい。「水も滴るやうな」刀身に膚接すれば、例外なく心の淨拭されるやうなすがくしい心持になるのがつねで、時としては銚子先から立昇る靄然たる和氣に包まれて春日煦々たるなごやかな心持になることさへあつた。亡父が秘蔵して余り他見を許さなかつた「伝貞宗」の一刀などもそれである。彦四郎貞宗は、正宗の婿養子で相門十哲の筆頭ではあるが、勿論正宗には及ばない。然し日本の刀劔史を一見すれば、巨匠正宗の上にも、またその上にも名匠大匠、峯巒の層々としてつらなるが如く、その山容もまた多趣多様である。かつて近衛信尋が家隆の富士の歌を絶讃して、これを正宗の名刀にたとへたとき、本阿弥光悦はこれに対して、成程、家隆の歌は正宗であらうが、赤人の歌は吉光である、妙鍛正宗にまさること遠しと応へたといふ大日本野史の記事は、小林秀雄さんによつても引用されてゐる（「芸術随想」）。吉光とは、栗田口の右兵衛尉国吉の子、藤四郎吉光のことで、脇差の作者としては

無双の名手として名高いが、脇差に限らず、熱田神宮の社宝のものなど、清明澄徹、一見して眼睛の清澄を覚えさせられる。また赤人の歌とは例の、田子の浦より船出して海上に眺められた富嶽の歌である。皓々たる白雪に輝いてすくっと海上に聳え立つ富士の姿と、吉光の玲瓏玉の如き刀身とのコレスボンダンスがいかにも清々しくうつくしい。ここにも私たちは日本本来の、色を超えた王者的白光の堂々たる威風を仰ぐ思ひがする。

アンドレ・マルローは根津美術館蔵の「那智滝図(十四世紀)」を一見して直下に白刃をかけたやうだと言ったが、これは彼の眼識の卓抜を立証したものと云つてよからう。

ところで吉光とまではゆかずとも、貞宗程度のもので、常住にこれを所持して居れば、心おのづから和暢、人と争ふ気持など消え失せるであらう。その意味で真の日本刀はおのが身の守りとなるとともに、人の心を浄めなごめる公器ともなるのである。心をすがすがしく浄めてうるはしきものとする(言向けやはす)威力が日本刀の本領である。

ところで地球と人類を絶滅を以て脅かしてゐる原爆の劫火を消伏する威力あるものは何か。日本刀はその鍛造の過程に於て灼熱されることもに、清明なる水との微妙な接触を経て水の精を吸収し、その真髓に於て澄徹玲瓏たる刀身と化する。草薙劔が天叢雲劔と呼ばれるのは何故であるか。劔と水との親縁性からも連想されるやうに、この神劔の蔵存するところ、神気に飽和された気流の上昇するのを、古代人はさながらに直観するやうに思つたであらう。日本刀劔の本質は清明なる水気である。この点について私は、故武田祐吉博士の卓見に教へられるところが多い(「古典の精神」、なほ、拙著「若きニイチエの識られざる神」八百頁参照)。

とまれ象徴的に表現すれば、原爆の劫火は、この(天叢雲劔)の神威力の発動により切断消伏されなければならぬいだらう。恰も、伊邪那岐命がその佩刀を以て火神迦具土神を斬却されたやうに。

(註)。(草)は(臭)で、(薙)は(蛇)であるから、(草薙劔)とは、大蛇の腹中から出たものを意味する、そして大蛇の棲息

するところは陰湿の地で、その上方には雲霧が多いから、天叢雲劍と呼ばれたのであらうといふ説もあるさうである。然しこの説には何か低次元なものの附着が感ぜられる。

以上、私は日本古道の源流たる色なき色、へしろを語つて少し詳密に互りすぎたやうであるが、ここに詩人高村光太郎がその詩魂の最高の標高を刻した詩集「大いなる日に」から次の一詩を録して、謂はば点睛を施しておきたいと思ふ。

天日の下に黄をさらさう

祖先は川に禊して穢れを祓つた

ただ白木の柱を立てて家を築いた

きよらかな比例そのもののみを命とした

眼にとまる塵一つ無いのを

一切の美の極みとした

袖を払つて今わたしが魂にきくもの

とほく深く又まことに己みがたい

貪婪多彩の文化をくぐつて

世にかくばかり潔く切なく勁い美が

一つの道とまでなつて興るのを

心ねぢけぬ輩は否むまい

氷を割つて川に身をそそぎ

今こそ天日の下に黄をさらさう

万人共にうけた稟性を世界の前に

かくすことなくさらけ出さう

臆するところなく育てよう

巷に竹と松とが繁茂する

わたしは大根をぶらさげて街を歩き

此の道美しけれど絶えず窮乏につづく事を思ひ

むしろ心たのしい決意にさびしく笑つた

光太郎がぶらさげて師走の大道を闊歩したのはやはり寒水で洗ひ上げた雪のやうに白い大根であつたらう。この種の大根にお目にかかる機会は今も全く稀になつてしまつたが、それを眼前に髣髴してみるだけで、その皓々たる白さは今も目に泌みるやうに思はれる。ここにもまた日本のへしろがあつた。平安朝以来、女房詞で大根を〈雪〉といふさうである。葱もまた芸術的には同族とみてよからう。

葱白く洗ひ上げたる寒さかな(芭蕉)

易水にねぶか流るる寒さかな(蕪村)

ところで一方ガラスフェンスターにみられるキリスト教的西欧美の極北にあるものは何か。或は奇矯にひびくかも知れないが、私にはそれは、十字架上に流血するイエスの鮮血の赤さであると思はれる。フライブルゲル・ミュンスターの薄明の堂内で、比類なく美しいガラスフェンスターを諦視しながら、私が直観したのはそのことであつ

た。それは遮るものなく晴れ上つた碧落のもと、燦煥たる陽光の直射に堪へ得るものではなく、そこに曝らされれば瞬刻にして黒ずみ固結し去るであらう。然しカタコムベを想はせる薄明の堂内で、全く独自の色ガラスと、それを透過する北方の弱い陽光との絶妙な協奏のうちに醸し出されるグラスフェンスタアの色彩のうるはしさもまた比類なきものである。その赤も青も緑も紫も黄も褐も、いづれもキリスト教的西欧の根源色たる〈鮮血の赤〉から脱化して、千変万化し来れるものであることを、ひそかに想ひつゞけてここに十四年、遂にこの予感を私は目下開催中の〈アール・ヌーヴォー展〉で確認することが出来た。即ちフェルナン・テスマール (Fernand Theymar) 作 (一九一四年) の繊細華麗を極めた透胎七宝の鉢 (Schüssel) は、実に〈血の滴り〉といふ銘をもつものであつた。それより二十四年以前 (一八九〇年) の同系統の略々同形の鉢の、花卉とも葉ともつかぬ模様に着された深紅のエナメルの色は一層鮮かに血の滴りを印象させる。作者がその快心の作に〈血の滴り〉といふ銘を刻したとき、彼のイメエヂの薄明のなかに、十字架上に流血するイエスの鮮血が光彩を放つてゐたのではないであらうか。

まことにステンドグラスの深邃微妙な色調も比類なくうるはしいものである。然しその根源が十字架上のイエスの鮮血の血紅色に発する以上、いかに千変万化してゐても、総体にわたつてそこはかたなく血の臭ひを漂はせてゐることも否めないであらう。キリスト教が宣教を行つた到るところで血の争乱を呼んだことも、この〈鮮血〉に鼓吹された狂信と無関係とは思へない。先年、平戸はじめ、北九州の切支丹ゆかりの地を巡歴したとき、筆者は到るところに血の臭ひの漂ふのを感じて無気味な思ひをしたが、これは非基督者の非キリスト教的感覚にだけ由来するものとも言へないであらう。共産主義イデオロゲンが自負する〈赤色思想〉の〈赤〉も、実はニヒリスティッシュに頽廢して混濁した〈死血〉の赤色にすぎなかつたのである。

とまれそのやうな根源的に次元を異にするそれ／＼の色彩感覚を起点に千変万化する日本とキリスト教的西欧との色彩スカーラの異と同とは、それ／＼の出自の決定的な差異を十分に考慮に入れた上で審細に味識されなければなら

ないであらう。言はず語らずのうちにキリスト教の神との隠微な血縁性を感じしむるハイデガー存在論に於ても人はこの辺の消息を一応心に入れておく必要があると思はれる。

6

この日、Domplatz の Altkirchweinstube で昼食を喫したとき傾けたライン酒の酔に陶然として、Salzstraße を逍遙してゐると、向ふから日本人らしい人が近づいてきて、今日はと挨拶する。日大講師で当地留学中の柳沢氏である。まことに気さくな好人物、これから何から何までお世話に与る人とのまことに有難い初顔合はせであつた。「いつ来たか」といふやうなことから、色々話がはづみ、ハイデガー研究家の K 氏が当地へみえた筈だが、御存知かと尋ねると、日本人会でその話は出たがまだお目にかかつてゐないといふ。氏がみえたら当然ハイデガー先生を訪問されるでせうから、お土産に持参した「樺の木版画」を届けて頂きたいと考へてゐるといふやうなことを話しあひながら漫歩をつづけてゐると、鞆を抱へて小急ぎにやつてきた小柄な日本人らしい人物が、傍らを通りすぎようとする、眼つきにもその色にもどこか狐疑的なかげりがあつて、フィーリングは余りよろしくない、然し柳沢氏は、独特の勘を働かせたものか、「お初にお目にかかりますが K 先生ではありませんか」と話しかけると果してさうであつた。K 氏はあくまで油断や隙をみせまいとするかのやうに、一寸峻しい目付でこちらを眺めてゐる。その態度には、自己にのみ立て籠らうとする狭隘さと、哲学者なのだといふ空しい自負のやうなもので人を威圧しようとする傲慢さのやうなものが読みとられた。これではとても話はできかねると咄嗟の間に感じたが、兎も角、これも一種のへめぐりあはせには違ひないのだから、一応当方の意のあるところは汲んで頂きたいと考へて披瀝したのは次のやうなことであつた、即ち、氏はハイデガー先生とお親しいとかねがね聞き及んで居りますが、近々先生を訪問される機会がおありでしたら、日本からゲルマニストで小野といふ男がやつて来てゐる、四十年近く先生の著作に親しみ、心から

尊敬申し上げてゐる、当地にこれから二ヶ月間滞在するのも、その主要目的は先生に拝眉の榮を得たいからである。もしお許し頂いて八月末頃にでも御引見頂ければと願つてゐるといふやうなことであつた。K氏が一発のもとにこの願望を粉碎したことは言ふまでもない。その語るところによれば、ハイデガーも最近はずつかり老ひぼれ、家に閉ぢこもつて殆ど人に会はない、それに夏はギリシヤにゆくことが多い、といふのであつた。さすが偉大な哲学者も、寄る年波には勝てないものか、お気の毒だといふのが、この言葉に接したときの私の実感であつた。それにしても酷暑の季節に、ギリシヤ旅行とは少し妙な話だ、といふ疑念が、チラッと脳裏をかすめ去つたが、ギリシヤに直接した体験をもたぬ身、それ以上、深く考へてみるわけにもゆかなかつた。然し帰途、十月の初旬から中旬にかけてギリシヤに滞在したとき、海浜で海水浴をしてゐる観光客らしいものをバスの車窓からみかけたから、真夏のギリシヤの暑さが思ひやられ、K氏の言葉の嘘構性もおのづからに判明したのである。

然し一方、K氏の身になつてみれば、ここフライブルクで始めて会つただけで、氣心の全く知れない人間を、世界有数の哲学者に紹介すべき義理などいささかもないし、当方の希望にどれ程深い根拠があつても、それはK氏の全く関知せざるところ、当方の申出をニベもなく却けたとしても、K氏だけを非難するわけにもゆかないだらう。然しその態度に妙に傲岸なところがあり、理由とするところに胡散臭いところがある。それにしても、これでフライブルク滞在の最大目的の一つがフイになつてしまふかと思ふと何とも残念でたまらず、せめて永年の謝意をこめて遙々日本から持参したお土産だけでもお届けしたいとの希望を表明してみたが、見ず知らずの人にプレゼントするのは、たとへ感謝の意味でも、ドイツの慣習に反すると主張、容易に引受けようとしなかつたが、K氏滞在中、万一機会があつたらお願ひしたいといふことで、漸く「それなら」といふところに漕ぎつけた。

それでまづK氏が今日の用向を済ませ、その間に私は下宿から用意の品を持つてきて、所定の場所で落合ふことにしたのである。それにしても、たとへ学問上の感謝の意味でも、相識のない人にプレゼントをするのはドイツの醇風

美俗に反するとは何とも奇妙な話である、一個のゲルマニストとして、ドイツ人のゲミュートの相当の深みまで味つたつもの私としては、どうしても腑に落ちかねるし、既に二年近く当地在留の柳沢氏も全く同感で、「そんな馬鹿なことではない、引受けたくないための口実にすぎない」と言ふ。たとへハイデガー先生がどんなに偉い人でも、真心のこもつたものなら、たとへ未知の人からの贈物でも喜ばれぬ筈はない。直接会へなくとも、あなた自身玄関先まで届けてみてはどうかと提案され、私自身もかねてから、よく／＼の場合はさうでもしようかと考へてゐたので柳沢氏に賛成したところで、丁度K氏に再会することになった。それで御面倒をおかけするのも心苦しいから、先刻のことは御放念を頂きたいと言ふと、K氏も欣然として賛成、ホツとしたといふ表情であつた。自分勝手の想像から、私は、K氏はハイデガー先生の愛弟子の一人かと考へてゐたが、その人柄に直接触れてみて、その誤りだつたらしいことに気づいたのである。この種の陰湿で侏儒的人間の本性を、ハイデガー先生ほどの人物が見抜けぬ筈はないと思はれてきたからである。

7

その後、フライブルクへの親近感を深めつつ、若い留学生諸氏の厚情にも浴して、共同でまた単独で行はれた、小、中旅行の記録は、本篇に直接の關係をもたないから、一切これを省略する。

八月二十九日(火)、快晴。八時半起床

当市滞在中余すところ略々三週間、余日少くなつて来たので、愈々念願の訪問を三十一日午後に行つてことにきめ、本日、予めハイデガー邸の見当をつけておくことにした。

朝食を了へ、二三友人知己へ手紙を書き了へると既に十一時を過ぎてゐた。Oberkirchでの昼食後、ミュンスター

に入り、まことに切れ味のよい澄明なカットグラスに快晴の正午の陽光をとほして燦煥と輝く薔薇窓 (Rosenfenster) を始め、グラスフェンスター特有の絶妙な色彩の諧調によつて堂内の空気までが微妙な色調に染められてゆくのを如実に体感しながら恍然たる心持で堂外に出たとき、燦然たる真夏の陽光が少々まぼろしく感ぜられた。そのとき中年のドイツ紳士に声をかけられ、この人に伴はれた三人の日本の女子学生諸君に紹介された。その一人、バーゼル大学留学中の山田君はこの紳士のお宅でお世話になつてゐる由、二人はそのお友達であるといふ。バーゼル大学の話、グラアスフェンスターの美しさなどについてドイツ紳士をまじへて暫らく気持よく歓談した後、互に健康を祈つて別れた。

それから小型デパート *Werner Blust* で多少食料品を購入した序でにセロテープを求めようとしたが、セロテープのドイツ語を考へたことがないので話がなか／＼通じない、手真似を入れて説明してゐるうち、「あゝテープフィルムか」といふ。恐らく *Tesafilm* と書くのであらう。遙々フライブルクくんだりまで来てセロテープのドイツ訳を始めて知つたとは気の利かぬ話。然し一九六七年以前刊行の独和、和独の辞書にこの語が収録されてゐるであらうか。帰国したら一応検索の要があらうと思はれた (筆者注、一九八〇年十二月刊行の三修社の和独に始めて収められた)。

次に郵便局で航空便を出した後、ツェーリンゲン行きの電車で終点下車、直ちに左(右?)折して狭い通路に入り、支線らしい鉄道のガード下をくぐり、また左(右?)折して、ゆるやかな坂道をたどりながら *Rötebuckweg 47* を注意深くさがしながらゆく。一寸戦前の仙台の大学町片平丁辺を思はせる閑静なただずまひである。左側に遂に念願のハイデガー邸をみつけた。邸宅は二階建てのガッシリした構へ。夏の昼下りの陽光をうけて輝いてゐる。小生よりも十一年前(一九五六年十二月)に訪問された辻村氏の文には、「小ぢんまりした質朴な、シンデルと言はれる鱗形の木片を張りめぐらした、美しさを消したお宅の門云々」と記述されてゐるが、壁乃至石の塀や生垣などの類によつて隠くされることのない邸宅は、門外から一眸のうちに眺めることが出来たと記憶する。人の身丈よりも低いこの門は、素

朴そのもので、そこにMHといふ標札がうちつけてある。言ふまでもなく Martin Heidegger の頭文字 M と H とから合成されたもの、日本風に言へば、花押とでも言ふべき趣があつた。ハイデガー哲学の精緻嚴密な性格とはまた異つた一種の隠士風の酒脱さが感ぜられて何かホッとする思ひであつた。

夜はミュンスターのパイプオルガン演奏を聴く。これで二回目である。ここには堂内の側面と背後に併せて四台の Orgel があり、壁側に装置されたものは、その姿から〈燕巢 (Schwalbennest)〉と呼ばれ、名器として有名である。一流の演奏家や作曲者が調律をかねて演奏してまわるものらしい。今夕の演奏者は Heino Schnbert (1928〜) である。前回、七月廿七日夕に演奏されたものは Johann Pachelbel (1653〜1706)―バッハ以前のパイプオルガンの最大の作曲家、演奏家で、バッハにも大きな影響を与へた―大バッハ、マクス・レーガー (Max Reger, 1873〜1916) のもので真に聴き応へがあつた。流石に最もオーソドックスなパヘルベル、とりわけバッハの曲は、この本格的な〈身廊〉の宏壮な空間にこそふさはしいもので、大魚が黒潮に乗つて遊弋するやうな趣きがあり、その豪宕な響音はざわめきわたる天上の大風を想はせるものがあつた。然しいささかも騒がしさの感ぜられないのは不思議である。レーガーは作曲家としては近代に属するだけに、余り感銘は覚えさせられなかつたが、それでも古典作家たちの残響のやうなものに感ぜられたし、少年時代からその数曲は耳にして来たので一種の懐さを覚えた。

然し今夕の曲目のうちヘンデルのものは流石に立派で、この優れた音楽者の風貌を目のあたりにする思ひであつたが、演奏者自身のものや Joseph Haas (1897〜1957) の曲には全く退屈させられた。流石の名器もこのやうな曲には耳をふさいで応答を拒絶してゐるのではないかと思はれた。

パイプオルガンはまた、宇宙的に豪壮な響音に於て優れてゐるだけではない。晴れた五月のフルールの緑草や輝くやうな野の花の間を吹きわたる微風のかそけさを想はせる微妙な諧音にも欠けてはゐないのである。私はあの夕、大バッハの曲を耳にしながら、はからずもそのやうな妙音の静けさにも触れてふと想つた、例へば尺八の千鳥の曲のや

うなものをフーガ形式のオルゲル曲に編曲して、この名器の演奏にかけてみたかどうか。逆に猛草竹を素材にしてオルゲルを製作し、バッハ、パヘルベル、ヘンデルなどを演奏してみてもどうか、と。

8

八月三十日(水)、薄曇り、後、晴。

仙台の先輩Y氏はじめ、家人に消息を記し、次にハイデガー先生に呈する書簡を草案し、その清書を了れば既に三時に近い。居室で茶菓を喫した後、ポストに行つて投函、近くの小公園風のところで小憩、五時近く Oberkirch へゆく。席に着かうとすれば向ふの食卓より声あり、誰かとみればK氏である。最初に会つたときに比べると多少感觸のよいのは、ハイデガー先生のことので気にかかることがなくなつたからでもあらう。まさに明日といふ日を控え、一息入れようとして来たここで、他ならぬこの人に逢ふといふのも一寸不思議な因縁である。然しもとよりそのやうなことは触れず、成心なく四方山ばなしをする、食物の味のよろしからぬこと、食事は健康維持のための一種の義務と考へてゐる人の少くないことなど。食後、近くのイタリア人経営の珈琲店にゆき、Werner Blust のところで別れた。

左に前記書簡の内容を略記する。

……私は H. Ono と申しまして東京から参りました。明治大学でドイツ語の初歩を教へてゐるへ一教師 (nur ein Lehrer) にすぎません。然し日本の大学ではこのやうな教師も一応教授と呼ばれて居ります(注)。

(注) ここで私は一応注を加へる必要を感じる。私は決して自嘲してゐるわけでも、新制大学の教養語学教師を軽視してゐる次第でもない。教育者の任務そのものには軽重のある筈はなく、真剣に立向へば学生の対応も真剣で、それはそれで火花も散るものであり、教科書の選び方によつては、下手なゼミ以上の成果も収められるのである。但、〈講座〉を有しないことで、〈教養

の先生」として学部教授諸公からはいささか軽くみられる風潮がなくもない。然し考へようによつては、自分の関心の薄い分野まで、セコハンの俄か仕込によつて講義用ノートをつくらなくとも済み、その余力をライフワークの製作に傾注することができる。そしてそこにこそ、研究者の正念場があるだらう。

一方、〈教養教師〉のこの気易さは、自己の研究主題をもたぬ怠惰な藩札諸氏に、心底から居心地のよさを感じさせてくれるので、三日すれば止められないもの尤たるものともなるのであり、それがまた、教養教師のだらしないさとして指弾の的ともなるのである。以上の注を付した上で、書簡本文に戻ることにする。

さて、三七年前、即ち一九三〇年四月、私が東北大学独文学科に入学したとき、私は直ちに哲学の高橋里美教授のゼミに加はりましたが、その用書は先生の名著「*Sein und Zeit*」でありました。全く弱年の私は、御高著の深さを十分に理解することはできませんでしたが、高橋教授の懇切な手引により、次第に深く先生の世界に導かれてゆき、諸著作から発する微妙な気線の照射をうけて三十余年間、先生の精緻厳密な思惟に鍛へられつつ徐々に独自の思惟の世界を啓開することができるようになりました。このことはどれ程・感謝しても感謝しきれるものではありません。

とりわけ現代の決定的な危機のさなかにあつて先生が〈*hebel der haustfreund*〉、〈*Der Feldweg*〉、〈*unterwegs zur sprache*〉、〈*Gelassenheit*〉、〈*Die Technik und die Kehre*〉などの諸篇に於て端的に表明された思惟と心情の深邃にしてうるはしき流露にふれて、いつも心底からの策励と鼓舞を覚えるのであります。

私たちはたとへ原爆がどれほど炸裂しようとも、それで地球と人類が絶滅するであらうとは信ずることができません。先生がヘルデルリンの〈*Wo Gefahr ist, wächst das Rettende auch*〉に対して表明された御見解はまことに玄妙を極めたもので、真正面からこれを反駁できる人は恐らくないであります。いつまたどのやうにして、そのやうな〈*転回*〉が生起するか、私たち人間の分際ですれを予見することはもとより出来ませんが、もし人類が滅亡する筈がないとすれば、この〈*転回*〉は何らかの仕方ですれを予見するに違ひありません。そして未曾有の大暴風が全地上を吹き捲つたあとで始めて、私たちは清朗な天日のもとに新天新地を仰視することが許されるでせう。私たちの国日本に於

ても、極く少数ですが、そのやうに信じてゐるものもあるのです。

私はこれまでの生涯を通じて、いつか先生に対する深厚な謝意を表明し得る日の到来を願つてきました。そして多年の念願叶つて先生のこのフライブルクに滞在することになりました。然し私は御高齢の先生をお妨げ致したくありませんし、また専ら文学や哲学の書を読んだり翻訳したりして過ぎてきましたので、縦横自在に哲学的論議を上下できる程、話し言葉に長じても居りません。それにまた一面識もないお方に不躰けにプレゼントを呈上するのはお国の良俗に反するかとも危惧してこのまま帰国しようかとも考へました。然し再びは逢ひがたいこの好機をみす／＼遁すのもまことに残念に存じますので、然るべきお方からの紹介状も持参せず、予め御都合を伺ふこともなく突然お訪ねしました失礼の程は、何卒御海容を賜り、多年に亘る学恩への心からの感謝のしるしとしてこの些少なプレゼントを御受納頂ければまことに幸甚に有します。」

9

八月三十一日(木)九時起床、薄曇。

昨日用意した書簡の控え(ドイツ語)を日録のなかに記入した後外出、食堂でゆつくり昼食を了へ、先生への訪問は十五時前後の心づもりで Schwabentor をくぐらうとして塔を仰げば、すでに十四時半である。二三日前より時計の工合よろしからず、略々一時間の遅れであつた。時間上には一寸齟齬を生じたやうだが、恰もこのとき薄曇りの空から一筋の陽光がサッと差ってきて幸先よしと感ぜられた、またいつもは相当待たせられるツェーリングン行きの電車が、乗り場に立つとスーッと来て目の前に停つたのも気持がよかつた。忽ち到着。道順に迷ひはなく刻一刻近づく。門前に立てば、一昨日は閉されてあつたもの、今日は僅かながら開かれてゐて、恰も「通られよ」と言ふものやうに思へた。門を入つて十二三步か、三・四段の石段をのぼり玄関外でベルを押せば、扉開かれ若夫人が応接に出られ

た。令息夫人でもあらうか。「日本から来ました」と言へば、直ちに階上へ声をかけられたそのとき、すでに階段に立つて居られた老夫人が直ぐ降りてこられた。「Herr Professor Heidegger は御在宅ですか」と尋ねると、恰も「お待ちしてゐました」とばかり、「こちらへこちらへ」と玄関脇の応接間へ招じ入れられてしまった。靴を脱ぐを要しないので全く一瞬間の出来事である。対話の仕方、順序など、何の心づもりもして来なかつたので、これは大変なことになつたと思ひ、咄嗟に俎上の鯉の覚悟を固めようとする違もなく、プロフェッサーは悠然と微笑されながら姿をあらはされた。必ずしも長身ではないが、がっしりした体軀、威あつて猛たげからず、まさに一世の大教授の堂々たる風格である。

まづ持参した「樁」の木版画と用意してきた書簡を呈し、一見一読せられんことを請ふ。版画の封は夫人が解いて一見せられ「moderne Kunst か?」と質問された。日本伝統の技法による現代の木版画ですと答へる。またそれに添へた和紙の優雅な封筒と書簡箋（同じく木版）に目をとほされ、〈schön?〉を連発して感嘆される。一方プロフェッサーは書簡の方を読み進まれ、まづ初めの方の「一介の教師のみ (Nur ein Lehrer)」といふところは何を感ぜられたものか、「あゝ、Lehrer か」と思はず声を出された。よつて小生、間髪を入れず、〈des elementar Deutschen〉と応じた。そこにつづいて「このやうな教師も一応教授とは呼ばれてゐるのです」といふあの箇所がくるのである。これまで先生を訪ねた日本人は悉く教授であり、敢て〈教師〉と名乗つたのは恐らく小生が始めてではなかつたであらうか。ドイツに於ける〈Professor〉と〈Lehrer〉との距離は日本では想像もできぬほど大きなもので、ドイツ人の〈教師〉でこの大教授を自宅に訪問するだけの胆力を有するものは余り多くはない筈である。それを敢て〈Lehrer〉と名乗つて訪ねてきたこの日本人は、そもそも何者かといふやうな想念が、一瞬、先生の心をかすめ去つたとしても不思議ではなかつたであらう。次に大学の高橋ゼミで先生の「Sein und Zeit」に結縁させられたところを読まれたものであらう、「ああ、君はタカハシの弟子か」と独り言のやうに洩らされた。「さうです、プロフェッサー タカハ

「シの Schüler です」と答へながら里美先生の慈顔が髣髴と眼底に揺曳するのを覚えた。そして「先生も亡くなられました」とつけ加へると、プロフェッサーはかすかに「あゝ」と低声を発せられ、若き日の僚友を偲ぶかのやうに一瞬、瞑目された。

夫人は小生を一面識あるイギリス人と思ひ違ひをして居られたらしく、小生の識らぬイギリス人の消息をしきりに尋ねられた。名乗る隙もなく招じ入られたのもこの思ひ違ひによるものであつたのであらう。夫人は素朴にして真率、暖い人柄のやうで、所謂、〈Frau Professor〉の固苦しやはいさむかも感ぜられなかつた。

ハイデガー先生は応接間と二階の書齋との間を、一、三回往来され、自著〈Aus der Erfahrung des Denkens〉、〈Vorträge und Aufsätze Teil II〉や、上半身の写真などを持参せられ、小生に所持してあるかどうかと尋ねられる、「皆所持してあります」と答へると、leiderと言はれたが、「有難く頂きます」と言ふと、ニコリして献辞を記され自署して贈つて下さた。

このやうな千歳一遇の好機に恵まれながら、予めそれに対する何らの心構へをして来なかつたことが今さらながら悔まれた。然し多少のリハーサルをしてきたところで、難解を以て鳴る先生の哲学を中心に縦論横説できる筈はないと考へて、少々固くなつてゐると、先生は辻村さんの、「Sein und Zeit」の邦訳と、K氏の「Über den Humanismus」の文庫訳を持つて来られ、これを知つてゐるかと思ねられる。K氏の方は一応目をとほして居りますが、辻村氏訳は、日本を出るときはまだ見かけませんでした。兎に角、先生の主要著作は原文で再読三読して居りますと申し上げると辻村氏訳は恐らくよく出来てゐる筈だから、読んでみるやうにと推挙された。

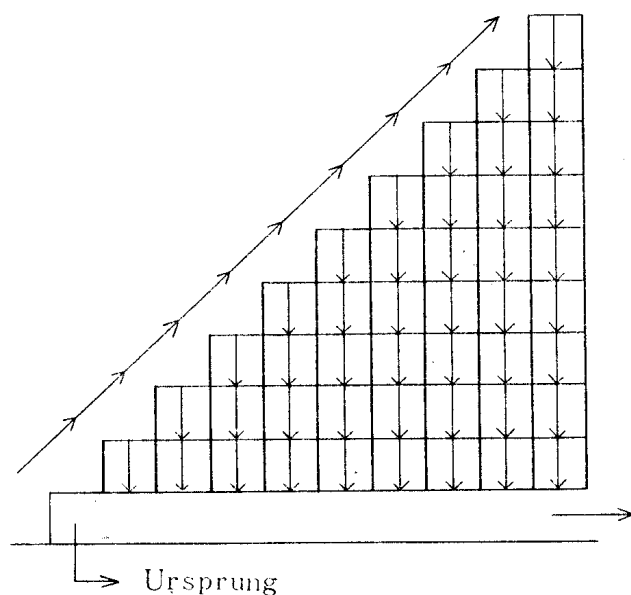
ところで小生としては文字通りこの天与の好機を有耶無耶にしまふに忍びなかつたし、また許されぬこととも思はれた。それで、「御高齢の先生を長時間煩はすのは心苦くもあり、また余り自由に言葉を操ることも致しかねますが、どうしても御教示頂きたいことが唯一つだけあります。それは先生が、ヘルデルリン詩の解明に當つて、

〈Heimkehr〉をめぐつて展開されたやうな、精神的な意味での〈帰郷〉といふことは果して可能かどうかと言ふこととです」と勇を鼓してお尋ねすると、「今の質問をここに書いてみよ」と紙を与へられた。そこで〈Können wir eigentlich zur Urheimat im geistigen Sinne zurückkehren?〉と記すと、即座に、それは「Traditionの問題だな」と言はれる。「さうです、昔から日本人は、身心ともに外国へ出てゆくと、往々にして故郷へ帰ることを忘れたのです。然しそれによつて異質文化を摂取同化しながら自己自身を更新し、豊かにすることができました。然し今回の大戦後の日本はまたもや異国的なもの、とりわけ不毛なニヒリスムスのラディカルな帰結たる共産主義イデオロギーの迷路に彷徨し自己本来の面目を忘失しようとして居ります。

それで心ある日本人はこれを深憂し、〈帰郷〉といふことの本質と可能性を心をこめて考へ直してみようとして居ります。先生はヘルデルリンの〈Heimkehr〉をめぐつて大変綿密な思惟を展開されましたが、あれはやはり刻下の日本の問題でもあるのです」といふ意味のことを、たど／＼しい調子で、言葉をさがしながら喘ぎ喘ぎ申し述べると、当方の趣旨を諒解され、「日本に於て伝統は *abbrechen* してゐるか」と尋ねられる。「今でもそれは存続してゐますが」と答へはしてみたものの、どこから、どのやうにそれを敷衍したものか、よく見当もつかず、適当な表現もみつからず、まことにもどかしい極みであつた。

それで拙いものではあるが略図なども描いて説明を加へてみたのである。(その図面は以下の説明から略々想像可能と思はれるが、拙劣なものながら、簡潔に図示すると、略々次のやうなものであつた。)

即ち〈帰郷〉とは、歴史の流れの現在の時点と考へられるところから〈始源 (Ursprung)〉へ向つて逆に溯るので



はない。それは不可能である。現代に到るまでの歴史の全過程に含まれた諸々のエポックへは、直線的な流れの様式史的な区分によつて表示さるべきではなく、現代を最上層として縦に積み重ねられた諸成層の集大成として把握さるべきものである。よつて始源への帰還とは、現代内至近代といふ歴史の最上層—あらゆる歴史時代は、それに先行する諸時代を基底としてある—から直下にボーリングを卸して、縦深に諸成層を穿貫し最下の成層—そこは全歴史の重圧のもとに岩盤のやうなものとしてある—を突破して、謂はば最早、歴史には属しない幽深な〈Oheim〉*に達し得たとき、そこになほ清冽な水流が見出されるなら、それは即ち源泉からの不断の直流そのもの、否それが即ち源泉なのであり、そこへ達し得るなら〈帰郷〉は可能となるでせうが、然しこの決定的な〈場〉にいささかも水流らしきものが見出されないならば、源泉は即ち涸渇してしまつたので〈帰郷〉は不可能であるでせう。「源泉は歴史の流れそのものの中に流れつづけてゐる」といふやうに先生は考へて居られるふしも見受けられ、確かにさういふ消息もあるでせうが、〈帰郷〉の問題に於ては、源泉の直流と歴史の流れとは厳密に区別さるべきではないでせうか**。

先生の〈帰郷〉の問題に於ては、この辺のところはどうも腑に落ちかねるところがあるのですが：」と言ふと、「自分も君の考へに賛成だが：」と答へられる、「然し先生のお考へをたどつてみると、どうしてもそのやうに思へないのですが：」と不器用にも身の程を忘れたことを申し述べると、「現代に於てはこの問題はまづ〈技術(Technik)〉の問題との厳密な対決を要する」**と言はれ、眼光俄かに鋭くなる。問題は漸くハイデガー哲学の核心の一つに触れたらしい。これから先の論議ならいくらでも、といふ姿勢を示された。そして、「その問題は目下精密に思考してゐる最中で、やがて発表する答である」と言はれ二階の書齋からタイプに打つた部厚な綴ぢこみを持参せられ、これを読んでみよと言はれる。「大変なことになつた」と思ひつつ、二・三頁めぐりながら大凡のところを読んでみたが、俄かに適確には理解しがたい。それで一応それを机上に置いて一息入れようとする、もつと精しくゆつくり読んでみよと言はれる。まことに厳しくオッカナイ先生なのである。

この間にプロフェッサーはまた書斎から四年前に読売新聞に発表されたといふ小島威彦氏との往復書簡を持参され、ここにもその問題は取扱はれてゐると言はれ、その要点について書いたものの校正刷がそのうちに出てくるから、もう一度来訪して要点を筆記するよう勧めて下さつた。それで、「さうさせて頂ければ誠に有難いのですが、すでに旅行の日程が組みあがつてゐて、まことに申訳ありません」と申述べると、先生も「本当に残念だ」と繰返し言はれる。それにしても読売のこのナンバーは必ず探し出して読むがよいと言はれるので、一九六三年、小島威彦氏との往復書簡といふのをメモして置いた**。

駐 * ハイデガー哲学に於て〈場 Ort〉とは格別な含蓄を有する言葉である。それについては拙著「ゲーテの古代的転回」(三修社刊一五二頁を参照せよ)。

** 歴史に於ては進化の所産に属さぬ〈超歴史 (Metahistorie)〉が働いて居り、奇蹟的要素が存在するといふニコライ・ベルチャイエフの視点は卓越してゐる(拙著、「若きニイチェの識られざる神」(三修社刊、三三三頁参照))

** それは何を意味するか明かにし得なかつたが、この場合、〈Die Technik und die Kehre〉などが当然考慮されるべきであらう。

** ハイデガーが、帰郷問題の解明をめぐる、その視圏の焦点に据ゑたものはヘルデルリン詩のうちでも最も重要なもの一つ「追想 (Andenken)」である。私もまたこの詩を髣髴しながら、以下、いささか私見を開陳してみたい。

〈根源〉を遡く深い〈場〉にもちなながら、文化の諸層が歴史的経歴のうちに層々と築き上げられてゆくといふことは、つねに一旦、〈根源〉を忘れ去つて、そこから遠ざかり、自己にフレムトな遙かな広袤に心を誘はれてゆかずにはすまぬ人間の本源の衝動に由来する。然しこのやうな衝動にだけ呪縛されて〈根源〉を忘れつくしてまつただけなら、歴史は不毛なものと化し去つてゐたであらう。然しヘルデルリンも言ふやうに、民族の記憶を奪ふ広大な海洋はまたそれを還へしめるものでもある。真の〈根源〉は忘れようとしても忘れ得ぬもの、忘れつくしたと考へても冥々のうちに、つねに深強い磁力によつて民族の心を惹きつけて止まぬものである。一旦、機縁熟すれば、この〈根源〉は思ひがけずにそれだけ鮮かに眼前に髣髴され、帰郷衝動は旧に倍する力を以て復活するだらう。たとへば七十年の生涯を通じ、全く異国文化の探究にのみひたりきつて一度も〈帰郷衝動〉を覚えぬ人がありとすれば、そのやうな人の〈遠心衝動〉などもたかの知れたものと言

つてよからう。

とまれ遠心求心両衝動の緊張と綜合によつて歴史は始めて結実するものであり、いづれか一方にのみ終始するなら歴史は稔りをもたないであらう。或は遠心的拡散のうちに消失し、或はひたすらなる求心的凝結のうちに化石した文化の実例を、人は歴々と指摘することができらう。それ／＼その特性を刻銘してゐる歴史の諸層には、それ／＼独自の遠心的衝動が対応する。私たちの時代にも勿論それは欠けてはない。然しあらゆる時代とひとしく、私たちの時代にも課せられた任務の達成を責任を以て憶念するなら、それ／＼の時代に達成されたこの両衝動の緊張と綜合との多趣多彩な姿を諦視しつつ、深くまた深くそれらの諸層を貫穿してゆき、もはや歴史には属しない（超歴史—ベルチャイエフ (Metahistorie)）に達しなければならぬ。この（根源）に達し得て始めて私たちは、その時代独自の遠心衝動の性格を把握し得るであらう。そしてそれを根源的な求心衝動によつて控御しつつ独自の時代の歴史的任務達成の方向を髣髴することができらう。

※※※

※※※

※※※

※※※

さて、注が少し詳しくなりすぎたやうである。再び本文に帰らう。

想へばまことに夢のやうな話である。予め許しをうけることもなく、誰からの紹介状ももたず、全く不意にお訪ねしたのがめられず引見され、当方のたど／＼しい言葉遣ひにも拘らず、濃かにその意のあるところを汲みとられ、問題が核心に触れたと感ぜられるや、どこまでも手を取つて指導して下さらうとする心遣ひの濃やかな暖かさが身に泌みるとともに、眉を圧して迫る厳格さには心の引きしまるのを覚えた。当方が自在に言葉を駆使して、教を仰げば、先生は欣んでなほいくらでも指導して下さつたであらう。なほ幾日かをつゞけて訪問して連続講義をお受けすることさへ可能であつたかと思はれる。然しまことに不甲斐なく申し訳なきことながら、これ以上とても持ち堪へられさうもないので、辞去することを心に決め、長時間に亘つて先生を煩はせたことを心から謝し、いつまでもご健で、今後とも（帰郷）といふやうな大変な難思惟についても益々私たちを啓発し鼓舞しつづけて下さるようお願いすると、プロフェッサーは力強く、夫人はやさしく握手された上、先生は玄関の外まで送つて出られ、またもや固く握手されたが、もう二度とお会ひできぬかと思ふと、小生の胸には何か込みあげてくるものが感ぜられた。先生も本

当に名残惜しそうで、その双眼には熱くきらめくものがみられたやうに思ふ。小生の眼眸に心からの謝意が溢れてゐたのを先生も見遁がされなかつたであらう。この間の消息は、言葉を俟たずして直通するものであることを私は確信する。

先生に於て最も私たちの仰視を促すものは、廻避しがたく目睫の間に迫つた有史以来の決定的な大機をまともに見据ゑてたぢろぐことなく、剛毅沈着、精緻な思惟を駆使して飽くまでその核心に迫らうとする真摯と誠実とである。「不可能を熱望するものをわれは愛する」と、マントオをして言はしめたのはゲーテである (Faust II. 2 Akt. Klassische Walpurgisnacht) が、遠く根源を喪失し去つた西欧精神史の終末近くに身を置きながら、先生は〈帰郷〉といふやうな不可能事に敢て挑戦しつづけて止まぬやうに思はれる。そして内外に亘るそのやうな戦のなかから、おのづからにして現成されてきた先生の雄偉豪宕なる風姿には、どこかルターを想はせるものがあり、その単なる存在に於て人を鼓舞し純化する威力を放射するのである。

再度の握手の後、別れ去らうとして玄関の石段を降り、姿勢を正して立礼したとき、私をみつめる先生の眼眸は煦かさと威厳にみちてゐた。玄関は閉ざされた。門を開けて立去らうとして、門外から応接間の方を望んで軽く一揖して頭を上げると、応接間の窓が少し開いてゐて、そこから当方を眺めてゐる人の影に気がついた。或は令息でもあつたらうか。そのときの私の挙措にはおのづからなる敬順の至情が流露してゐたであらう。

ハイデガー邸の背面は、私の下宿 Sternwald とつづいた丘陵地帯であるらしく、その山の彼方から一列の鳥群が、夕刻近い空の碧さのなかを渡り去つてゆくので眺められた。時に八月三十一日も午後五時を過ぎてゐたであらう。ドイツの夏も今日を最後にすぎ去らうとしてゐるのである。

九月四日(月)、昨夜一晚中降雨。蕭々として早くも秋霖の感じである。

昼食後、先生への礼状を書く。以下はその抜萃。

……昨日は全く不意にお訪ね申し上げたのにも拘らず快く御引見頂き、貴重な時間をお割き下さつて手厚いご指導に与り、心から拝謝申し上げます。

実は永年に亘る先生の学恩に対する御礼のしるしとして、日本から携えてきましたものを、玄関先にお届けしたら、直ぐに立帰らうと思つて居りましたので、親しく御引見頂けるとは思ひもよらず、すつかり狼狽してしまつた次第です。私は先生を世界の哲学者中の最高峯と仰いで来ました。高橋教授は最初のゼミナールの時間に、先生はヘーゲル以後の最大の哲学者で、「*Sein und Zeit*」は「*Phänomenologie des Geistes*」以後の画期的名著であると語られました。そして私は今もこの言葉を肝に銘じて忘れることで出来ません。先生が最近の「*Die Technik und die Kehre*」や「*Aus der Erfahrung des Denkens*」で表明されたこと、否、詩作され詠言されたことは、私には殆ど予言者の言葉のやうに響きます。現代の哲学者で先生以外にそのやうな高処に立たれた人があるでせうか？(—ここにヤスパースとの比較論が入るが長くなるので省略する) —そこは〈*seyn*〉から招命された人だけが立つことを許されるところのやうに私には思われます。ヤスパース教授は確かに哲学史には属しませうが、先生の業績は、凡そ思惟のことに従ふ人々が、つねに必ず立戻るべき原点としてとどまるでせう。

先生は既に決定的な〈大機 (*Jahre der Entscheidung*)〉の到来を眼中に収めて居られるのでせうか。その予感是最近の諸著作の上を吹きわたつてゐるやうに私には思われます。然しそこには暗らさは感ぜられず、往々にして爽やかな暁の光のやうなものが予感されます。それは〈*seyn*〉の方から射してくるものでせうか。〈*Wenn das frühe Mor-*

genicht still über den Bergen wächst...」と先生は刻銘して居られますが、この一句に私はまさにダンテを想起させられます。このやうな偉大な精神に顔々相照して立つことは、私にはまさに畏怖すべきことに思はれました。当初私は威厳にみちた先生の眼眸が鋭く私の全身に注がれるのを感じましたが、次の瞬間に先生の慈顔に接して心の緊張が自然にとけ去つてゆくのを覚えました。略々四十年近く先生は私の最も厳格な教育者の一人でしたが、今回直接にお目にかかつて、同時に先生が慈念に溢れた解放者であることも実感致しました。

11

九月五日(火)、晴。

早晩三時ごろ目覚め、容易に眠り来らず。今回の遭逢の不可思議さと先生の慈念の深さを偲べば眼底おのづから潤ひ、心情の流露するところ、またおのづから国風の調べと化してゆくのを覚えた。略々次の十首にまとまらうとして浅く眼つたと感じたが、目をさませば七時。直ちに起床して洗顔、次の十首を録した。

四十年を師と仰ぎきて今日ここに まみえぬ遂に 夢にはあらず

誰人のみちびきうけず あらかじめ 文せざりしも 咎めたまはず

かねてより待ちうけられしかに思はるる 老刀自もともに迎へたまへば

威あれども 優しさこもる眼差しに 遙ろけく来しをいたはらせつつ

歩々しくもの言はぬを内にこもる 情汲ますかやさしき面輪

拙なかる間に応へて書齋ゆも もて来し文のメモとらせたまふ

優さしけど、厳しさこもる師の風姿すぶた 目さかに仰ぎま 心うたれつ

再びはまみゆるときも来るまじ 真幸まことくませとただに祈れば

さらばいざと やさしく手執らせ見つめ給ふ 眼差あつし 哭かざらめやは

山越ゆる鳥のひとつら一列 空碧く 今日けふの 一日いちにちに夏ゆかんとす

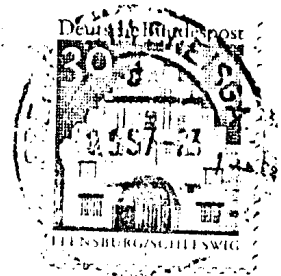
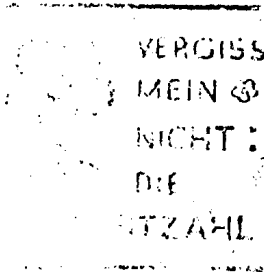
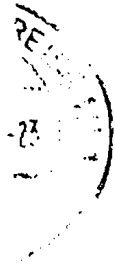
12

九月九日(土)、降雨、起床八時、

朝食の済んだころ、ハルテル夫人から郵便物が届けられる。

まづパリーの竹本忠雄氏からの手紙を読む。二十日間ほどの休養旅行から帰られ、当方八月二十二日差出しの航空便に始めて目をとほされた由、市川から送らせた書物も入手され喜ばれた模様、小生のパリー訪問を心待ちにして下さるとのこと、ホテルの予約もして下さったといふ。まことに有難いことである。

次に洋封筒のもの、先日何かの広告のやうなものが届いたのでこれもその類ひかと、何気なく裏をかへすと、思ひもかけずハイデガー先生からの親書である。タイプは使用されず肉筆で書かれてゐる、直ちに封を開く、先生独特の書体であるが、二三特色を把握すると判読を要せずらく／＼読めた。再読三読し深い感動に時のたつのを忘れた。ここに写真版を挿入し拙訳を試み、二、三注を加へておく。



Herrn Professor Dr. Hiroshi Ono

78 Freiburg i. Br.

Sternwaldstr. 29

bei Frau H. Harter

Freiburg: B. 8. Sept. 1967.

Sehr geehrter Herr Kollege,

mir haben Sie mir mit Ihrem ausführlichen und so freundlichen Brief erneut eine große Freude gemacht.

Wenn ich an all das denke, was mir nicht gequält ist in meinem Denken, was unumgänglich bleiben müsste, dann müß ich selbst sehr gering denken von dem, was vorliegt - und für lange Zeit wird das Denken machtlos bleiben u. mir weniger zugänglich. Es verfährt nicht über die Mittel und Instrumente der Kritik und Vertiefung, mit denen das technische Denken arbeitet.

Aber vielleicht war die "Wirkung" des Denkens immer geheimnisvoll und spärlich.

Dass Sie mir noch ein weiteres Kostbares

Blatt Ihres Künstlerfreundes schenken, dafür danke ich Ihnen noch besonders.

Aber es ist für uns vorläufig noch befreundend, aus dem einfachen Grunde, weil uns die Welt, aus der es kommt in die es gehört, nicht vertraut ist.

Ich wünsche Ihnen noch einen fruchtbaren Aufenthalt in unserem Land und sende Ihnen zum Andenken ein Bild von unserem Haus, das unser Sohn aufgenommen hat.

Mit freundlichen Grüßen, auch von meiner Frau

Jf

Martin Heidegger

ブライスガウなるフライブルクにて 一九六七年九月八日、Sehr geehrter Herr Kollege⁽¹⁾

貴方はその詳細で友情にみちた手紙を以てまた改めて私に大きな喜びを与へて下さった。

私が自分の思惟(の仕事)に於て、首尾よく成しとげられなかつたものや、仕上げの済まぬままの姿で残しておかなければならなかつたもの、そのやうなすべてに想ひを致しますと、兎に角、成しとげて目の前にあるものことなど、自分としては全くとるに足らぬものと考えないわけにはゆきません。この先も永いこと、思惟(das Denken)⁽²⁾といふものは「力」をもたぬ(machtlos)⁽³⁾ままでありませうし、それに近づける人の数もほんの僅かに限られるでせう。それは伝達や普及のための手段や道具類を気儘に操るわけにはゆかないのです、技術的思惟ならさういふもので仕事をしてゆくわけなのですが。

然し多分思惟の「働きかけ」⁽⁴⁾といふものはいつの世にも靈妙不可思議のものでもあれば、つましく目立たぬもの⁽⁵⁾もあつたのでせう。

貴方がお友達の芸術家の貴重な版画を、さらにまた一枚お贈り下さったことに対し、とりわけ御礼申し上げます。然し差し当りそれは私たちにとつてなほ奇異なものと思はれます。それは、この作品がそこに由来し、またそこへ帰属する世界が私たちには馴染みがないといふ単純な理由からなのですが。

私は貴方が私の国に滞在されて稔豊かにすごされることをお祈り致します。そして私の息子が撮影した拙宅の写真を一枚記念としてお贈りします。私の妻からもよろしくと申し出ました。マルティーン・ハイデガー。

注(1) 直訳すれば、「心から尊敬する僚友氏」である。「僚友」といふこの呼びかけには、通り一辺のものでない親愛感がこめられてゐるやうに私には思はれる。私がこの呼びかけに値ひしないことは勿論である。里美先生なら名実ともにそれにふさはしいであらうが。

(2) (3) 〈das Denken〉である。〈mein Denken〉とか〈technisches Denken〉とかいふやうな私的なものでも技術的なものでもなく、哲学の生命的核心をなす堂々たる〈das Denken〉である。「Was heißt das Denken?」といふやうな先生の著作を念頭におけば哲学的 Denken がいつの世にも〈力をもたぬ(machtlos)〉ままであらうといふことは、〈Denken〉の無力を嘆いたものではなく、哲学に於ける Denken と政治的な〈力(Macht)〉との永久の無縁を宣言したものと受けとらるべきである。

(4) „Wirkung” 本書簡中、引用符のある唯一の語である。動詞 Wirken の名詞化であるとすれば動勢を含むことは当然であらう。そこには〈働きかける〉側と、それを真剣に受けとめる側の双方が含まれてゐる。

(5) 〈spätlich〉直訳すれば〈後ましい〉であり、もし〈つづつ、つづつ、つづつ〉即ち〈spätlich〉な生活との内面的親縁性を考慮すれば、ならう。然し〈慎ましやか〉即ち anspruchlos な生活と〈後ましい〉即ち spätlich な生活との内面的親縁性を考慮すれば、日本風に言霊のさきはふところを考慮してつづつ、つづつ、つづつと訳しても必ずしも訳しすぎではないであらう。

この〈つづつ、つづつ〉は、爪に燈をともしやうな〈さもしさ〉ではなく、道元風の「貧なるが道に親しきなり」と相通ふものである。ハイデガーもヘルデルリン解釈のなかでこのやうな〈貧(Armut)〉を推重してゐるが、この辺を考へあはせれば、この〈spätlich〉といふ言葉にこめられたハイデガーの深意もほぼ推察され得るだらう。

(6) 出雲神馬の木版画

西欧精神史上・ヘーゲル以後の人と言はれるこの大思想家が、素朴な一日本人に対して吐露されたこれらの数行に深い感動を覚えるのは、ひとり当事者たる私だけに限られないであらう。そこに私は先生の祈りのやうなものを読みとる思ひである。ここにもまた人は晩年の諸著作を根柢から支へてゐるもの、即ち人類の将来に対する深憂と、そのための祈りに親縁な思惟と心情がひつそり流露されてゐるのに気付くであらう。先生の思惟の精緻と強靱に対する感嘆の余り、往々にして人はこのやうな深密な祈念の存在を見遁し勝ちである。然しここにこそ先生の人格の深邃なる所以があるのではないか。先生の思惟はまさに〈Denken als Gebet〉と呼ばれるにふさはしいであらう。

一世のこの大思想家が、簡浄なこの一書簡に於て、自己生涯のすぐれた業績に対して表明された慎しみ深い謙抑のなかから、おのづからにして煌々きらめ出る微光を具眼の士は見遁すことはないであらう。

※※※

※※※

※※※

先生から贈られた肖像並に邸宅の写真を左右に眺め得るやうに観音開きの美事な書卷仕立——黒うるしを想はせる総革装、金の箔押し——とし、署名入りの「Aus der Erfahrung des Denkens」は、これを絢爛さと渋さとの微妙にバランスのとれた schick な意匠の Ganzlederband の特装本に制作、さらに精緻な設計にもとづき、造本技術の粋を結集してつくられた一種の〈宝函〉のうちはこの両者を収めて届けて下さったのは世界造本装幀芸術界の最高峯、ケルスティン・ティニ・ミウラ女史である。これはもはや単なる一家の私物ではなく、謂はば天下の公器の一種であり、その意味で永く伝世してゆきたいと考へてゐる。

—昭和五六年八月廿七日—